

※募集期間は8月中旬から9月末日です。

自治医科大学附属さいたま医療センター 小児科専門研修プログラム

目次

1. 自治医科大学附属さいたま医療センター小児科専門研修プログラムの概要
2. 小児科専門研修はどのように行われるのか
3. 専攻医の到達目標
 - 3-1 習得すべき知識・技能・態度など
 - 3-2 各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得
 - 3-3 学問的姿勢
 - 3-4 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性
4. 施設群による研修プログラムと地域医療についての考え方
 - 4-1 年次毎の研修計画
 - 4-2 研修施設群と研修プログラム
 - 4-3 地域医療について
5. 専門研修の評価
6. 修了判定
7. 専門研修管理委員会
 - 7-1 専門研修管理委員会の業務
 - 7-2 専攻医の就業環境
 - 7-3 専門研修プログラムの改善
 - 7-4 専攻医の採用と修了
 - 7-5 小児科研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件
 - 7-6 研修に対するサイトビジット（訪問調査）
8. 専門研修実績記録システム、マニュアル等
9. 専門研修指導医
10. Subspeciality 領域との連続性

1. 自治医科大学附属さいたま医療センター 小児科研修プログラムの概要

小児科は、生まれたての新生児から、幼児、学童期を経て、思春期に至るまでの幅広い、異なった年齢層を対象とした診療単位である。診療においては、疾患個々の概念のみならず、小児の成長・発達を見極めなくてはならない。そのためには、基本的な正常発育・発達という知識が必要であり、さらに年齢や性別によって発症、あるいは合併する疾患が異なるということを理解しなくてはならない。小児科医は子供たちの **General Physician** としての能力が求められ、小児領域における重要な疾患を幅広く経験し、知識とチーム医療・問題対応能力・安全管理能力を獲得し、家族への説明と同意、信頼を得る技能を身につけた子どものプロフェッショナルになる必要がある。

本プログラムでは、「小児医療の水準向上・進歩発展を図り、小児の健康増進および福祉の充実に寄与する優れた小児科専門医を育成する」ことを目的とし、一定の専門領域に偏ることがない、幅広い研修システムを提供する。専攻医は「小児科医は子どもの総合医である」という基本的姿勢に基づいて3年間の研修を行い、「子どもの総合診療医」「育児・健康支援者」「子どもの代弁者」「学識・研究者」「医療のプロフェッショナル」の5つの資質を備えた小児科専門医を目指すことになる。

専門研修1年目は自治医科大学附属さいたま医療センター小児病棟で、感染性疾患・内分泌代謝疾患・アレルギー疾患・呼吸器疾患・消化器疾患・腎泌尿器疾患・循環器疾患・神経疾患を担当医として研修し、周産期センター新生児部門では、分娩立ち会い、周産期医学、新生児疾患、先天異常疾患を6か月研修する。2年目以降は自治医科大学附属病院・とちぎ子ども医療センター病院で6か月、血液・腫瘍疾患、腎・泌尿器疾患を中心に研修する。また、地域小児医療を中心とした研修をさいたま赤十字病院で3～6か月行う。3年目は自治医科大学附属さいたま医療センターですべての領域で総合的に研修する。3年間を通じて、外来小児科学、乳児健康診査と育児相談、予防接種などの小児保健・社会医学の研修と救急疾患の対応を担当医として研修するカリキュラムとなっている。

当院はさいたま市の小児2次救急病院として指定されており、周産期センターは県の地域母子周産期センターとして指定され、埼玉県の負託を受けて運営されている。大学病院としての高度な専門医療の他に、2次から3次までの救急患者を受け入れる体制も有しており、小児科医として欠くことのできない救急疾患の対応、急性疾患、周産期医学の研修ができる施設である。また、小児科独自に6台の超音波診断装置を有し、他の医療機関の小児科よりも積極的に超音波診断を実践している。超音波専門医の指導下に専攻医自ら検査を行い、小児の超音波検査の基礎を学ぶことができる。

2. 小児科専門研修はどのようにおこなわれるか

3年間の小児科専門研修では、日本小児科学会が定めた「小児科医の到達目標」のレベルAの臨床能力の獲得をめざした研修を行う。到達度の自己評価と指導医からのアドバイスを受けるために、「小児科専門研修手帳」を常に携帯し、定期的に振り返りながら研修を進めることになる。

1) 臨床現場での学習：外来、病棟、健診などで、到達目標に記載されたレベルAの臨床経験を積むことが基本となる。経験した症例は、指導医からフィードバック・アドバイスを受けながら、診療録の記載、症例のサマリーレポート作成、臨床研修手帳への記載（ふりかえりと指導医からのフィードバック）、臨床カンファレンス、抄読会（ジャーナルクラブ）、臨床病理検討会（CPC）での発表などを経て、知識、臨床能力、プレゼンテーション能力を養う。

- ・「小児科専門医の役割」に関する学習：日本小児科学会が定めた小児科専門医の役割を3年間で身につける（次項参照、研修手帳に記録）。
- ・「経験すべき症候」に関する学習：日本小児科学会が定めた経験すべき33症候のうち8割以上（27症候以上）を経験する（次項参照、研修手帳に記録）。
- ・「経験すべき疾患」に関する学習：日本小児科学会が定めた経験すべき109疾患のうち8割以上（88症候以上）を経験する（研修手帳参照、記録）。
- ・「習得すべき診療技能と手技」に関する学習：日本小児科学会が定めた経験すべき54技能のうち、8割以上（44技能以上）を経験する（研修手帳に記録）。

自治医科大学附属さいたま医療センター小児科専門医研修プログラムの年間スケジュール

月	1年次	2年次	3年次	修了者	概要
4	○				小児科研修開始ガイダンス
		○	○		研修手帳を研修管理委員会に提出（チェック）
				○	研修手帳・症例レポート等を研修管理委員会に提出（判定）
					<日本小児科学会学術集会> ●研修管理委員会 ・研修の進捗状況の把握 ・研修終了判定 ・次年度の研修プログラム、採用計画などの策定
5					<日本小児科学会埼玉地方会>
				○	小児科専門医認定審査書類の作成
6				○	小児科専門医認定審査書類の提出
8					<小児科専門医取得のためのインテンシブコース>
9					<日本小児科学会埼玉地方会>
				○	日本小児科学会 小児科専門医試験
	○	○	○		臨床能力評価（Mini-CEX; mini clinical examination）
	○	○	○		研修手帳の記載、指導医との振り返り
10				○	●研修管理委員会 ・研修の進捗状況の把握 ・次年度採用者の書類審査・面接
12					<日本小児科学会埼玉地方会>
					小児科納会
2					<日本小児科学会埼玉地方会>
3					小児科専門医更新、指導医認定・更新の提出
	○	○	○		臨床能力評価（Mini-CEX）
	○	○	○		360度評価
	○	○	○		研修手帳の記載、指導医との振り返り、研修プログラム評価

<当研修プログラムの週間スケジュール（自治医科大学附属さいたま医療センター）>
 グレー部分は特に教育的な行事である。詳細については4項を参照のこと。

	月	火	水	木	金	土・日
8:00-8:15	症例検討会	抄読会	学会予行など			週末日当直 (2/月)
8:15-9:00	朝カンファレンス（症例検討会時は8:30から）					
9:00-12:00	病棟、2年目から一般外来	病棟	病棟	病棟	病棟、2年目から一般外来	
	救急車対応・外来処置（曜日当番制）					
12:00-13:00	必要に応じ病棟・外来処置					
13:00-16:30	病棟	病棟	乳児健診、病棟	病棟、予防接種外来	病棟	
	学生・初期研修医の指導		総回診		学生・初期研修医の指導	
救急車対応・外来処置（曜日当番制）						
16:30-17:30	夕カンファレンス（患者申し送り） 症例検討					
17:30-18:30		発達カンファレンス	周産期カンファレンス		エコーカンファレンス	
	当直（1/週）					

2) 臨床現場を離れた学習：以下の学習機会を利用して、到達目標達成の助けとする。

- (1) 日本小児科学会学術集会、分科会主催の学会、地方会、研究会、セミナー、講習会等への参加。
- (2) 小児科学会主催の「小児科専門医取得のためのインテンシブコース」（1泊2日）：到達目標に記載された24領域に関するポイントを3年間で網羅して学習できるセミナー
- (3) 学会等での症例発表
- (4) 日本小児科学会オンラインセミナー：医療安全、感染対策、医療倫理、医療者教育など
- (5) 日本小児科学会雑誌等の定期購読および症例報告等の投稿
- (6) 論文執筆：専門医取得のためには、小児科に関する論文を査読制度のある雑誌に1つ報告しなければならない。論文執筆には1年以上の準備を要するので、指導医の助言を受けながら、早めに論文テーマを決定し、論文執筆の準備を始めること。

3) 自己学習：到達目標と研修手帳に記載されている小児疾患、病態、手技などの項目を自己評価しながら、不足した分野・疾患については自己学習を進めること。

4) 大学院進学：専門研修期間中、小児科学の大学院進学は可能だが、専門研修に支障が出ないように、プログラム・研修施設について事前相談すること。小児科臨床に従事しながら臨床研究を進めるのであればその期間は専門研修として扱われるが、研究内容によっては専門研修が延長になる場合もある。

5) サブスペシャルティ研修：10項を参照のこと。

3. 専攻医の到達目標

3-1. (習得すべき知識・技能・研修・態度など)

1) 「小児科専門医の役割」に関する到達目標：日本小児科学会が定めた小児科専門医としての役割を3年間で身につける（研修手帳に記録する）。

これらは6項で述べるコア・コンピテンシーと同義である。

役割		1 年 目	2 年 目	終 了 時
子どもの 総合診療 医	子どもの総合診療 <ul style="list-style-type: none"> ● 子どもの身体、心理、発育に関し、時間的・空間的に全体像を把握できる。 ● 子どもの疾病を生物学的、心理社会的背景を含めて診察できる。 ● EBMとNarrative-based Medicineを考慮した診療ができる。 			
	成育医療 <ul style="list-style-type: none"> ● 小児期だけにとどまらず、思春期・成人期も見据えた医療を实践できる。 ● 次世代まで見据えた医療を实践できる。 			
	小児救急医療 <ul style="list-style-type: none"> ● 小児救急患者の重症度・緊急度を判断し、適切な対応ができる ● 小児救急の現場における保護者の不安に配慮ができる。 			
	地域医療と社会資源の活用 <ul style="list-style-type: none"> ● 地域の一次から二次までの小児医療を担う。 ● 小児医療の法律・制度・社会資源に精通し、適切な地域医療を提供できる。 ● 小児保健の地域計画に参加し、小児科に関わる専門職育成に関与できる。 			
	患者・家族との信頼関係 <ul style="list-style-type: none"> ● 多様な考えや背景を持つ小児患者と家族に対して信頼関係構築できる。 ● 家族全体の心理社会的因子に配慮し、支援できる。 			
育児・健康 支援者	プライマリ・ケアと育児支援 <ul style="list-style-type: none"> ● Common diseasesなど、日常よくある子どもの健康問題に対 			

	<p>応できる.</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 家族の不安を把握し, 適切な育児支援ができる. 			
	<p>健康支援と予防医療</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 乳幼児・学童・思春期を通して健康支援・予防医療を実践できる. 			
子どもの代弁者	<p>アドヴォカシー (advocacy)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 子どもに関する社会的な問題を認識できる. ● 子どもや家族の代弁者として問題解決に対処できる. 			
学識・研究者	<p>高次医療と病態研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 最新の医学情報を常に収集し, 現状の医療を検証できる. ● 高次医療を経験し, 病態・診断・治療法の研究に積極的に参画する. 			
	<p>国際的視野</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 国際的な視野を持って小児医療に関わることができる. ● 国際的な情報発信・国際貢献に積極的に関わる. 			
医療のプロフェッショナル	<p>医の倫理</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 子どもを一つの人格として捉え, 年齢・発達段階に合わせた説明・告知と同意を得ることができる. ● 患者と家族のプライバシーに配慮し, 小児科医としての社会的・職業的責任と医の倫理に沿って職務を全うできる. 			
	<p>省察と研鑽</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 他者からの評価を謙虚に受け止め, 生涯自己省察と自己研鑽に努める. 			
	<p>教育への貢献</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自身が小児医療に関わるロールモデルとなり, 後進の教育に貢献できる. ● 社会に対して小児医療に関する啓発的・教育的取り組みができる. 			
	<p>協働医療</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 小児医療にかかわる多くの専門職と協力してチーム医療を実践できる. 			
	<p>医療安全</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 小児医療における安全管理・感染管理の適切なマネジメントができる. 			
	<p>医療経済</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 医療経済・保険制度・社会資源を考慮しつつ, 適切な医療を 			

実践できる.			
--------	--	--	--

2) 「経験すべき症候」に関する到達目標

日本小児科学会が定めた経験すべき 33 症候のうち 8 割以上 (27 症候以上) を経験する (研修手帳に記録する)。

症候	1 年目	2 年目	修了時
体温の異常			
発熱 (含不明熱)、低体温			
疼痛			
頭痛			
胸痛			
腹痛 (急性、反復性)			
背・腰痛、四肢痛、関節痛			
全身的症候			
泣き止まない、睡眠の異常			
発熱しやすい、かぜをひきやすい			
だるい、疲れやすい			
めまい、たちくらみ、顔色不良、気持ちが悪い			
ぐったりしている、脱水			
食欲がない、食が細い			
浮腫、黄疸			
成長の異常			
やせ、体重増加不良			
肥満、低身長、性成熟異常			
外表奇形・形態異常			
顔貌の異常、唇・口腔の発生異常、鼠径ヘルニア、臍ヘルニア 股関節の異常			
皮膚、爪の異常			
発疹、湿疹、皮膚のびらん、蕁麻疹、浮腫、母斑、膿瘍 皮下の腫瘍、乳腺の異常、爪の異常、発毛の異常、紫斑			
頭頸部の異常			
大頭、小頭、大泉門の異常			
頸部の腫脹、耳介周囲の腫脹、リンパ節腫脹、耳痛、結膜充血			
消化器症状			

口腔内のただれ、嘔吐（吐血）、下痢、下血、血便、便秘、裂肛			
腹部膨満、肝腫大、腹部腫瘤			
呼吸器症状			
咳、嘔声、喀痰、喘鳴、呼吸困難、陥没呼吸、呼吸不整、多呼吸			
鼻閉、鼻汁、咽頭痛、扁桃肥大、いびき			
循環器症状			
心雑音、脈拍の異常、チアノーゼ、血圧の異常			
血液の異常			
貧血、鼻出血、出血傾向、脾腫			
泌尿生殖器の異常			
排尿痛、頻尿、乏尿、失禁、多飲、多尿、血尿、陰囊腫大 外性器の異常			
神経・筋症状			
けいれん、意識障害			
歩行異常、不随意運動、麻痺、筋力が弱い、体が柔らかい floppy infant			
発達の問題			
発達の遅れ、落ち着きがない、言葉が遅い、構音障害（吃音） 学習困難			
行動の異常			
夜尿、遺糞			
泣き入りひきつけ、夜泣き、夜驚、指しゃぶり、自慰、チック			
うつ、不登校、虐待、家庭の危機			
事故、傷害			
溺水、管腔異物、誤飲、誤嚥、熱傷、虫刺			
臨死、死			
臨死、死			

3) 「経験すべき疾患」に関する到達目標

日本小児科学会が定めた 109 疾患のうち 8 割以上 (88 疾患以上) を経験するようにする (研修手帳に記録する)。

新生児疾患、先天異常	クラミジア感染症	神経・筋疾患
低出生体重児	百日咳	熱性けいれん
新生児黄疸	RS ウイルス感染症	てんかん

呼吸窮迫症候群	肺炎	顔面神経麻痺
新生児仮死	急性中耳炎	脳炎、脳症
新生児の感染症	髄膜炎（化膿性、無菌性）	脳性麻痺
マス・スクリーニング	敗血症、菌血症	高次脳機能障害
先天異常、染色体異常症	真菌感染症	筋ジストロフィー
先天代謝、代謝性疾患	呼吸器疾患	精神・行動・心身医学
先天代謝異常症	クループ症候群	心身症、心身医学的問題
代謝性疾患	細気管支炎	夜尿
内分泌疾患	気道異物	心因性頻尿
低身長、成長障害	消化器疾患	発達遅滞、言語発達遅滞
単純性肥満、症候性肥満	腸重積	自閉症スペクトラム
性早熟症、思春期早発症	反復性腹痛	AD/HD
糖尿病	肝機能障害	救急
生体防御、免疫	循環器疾患	けいれん発作
免疫不全症	先天性心疾患	喘息発作
免疫異常症	川崎病の冠動脈障害	ショック
膠原病、リウマチ性疾患	房室ブロック	急性心不全
若年性特発性関節炎	頻拍発作	脱水症
SLE	血液、腫瘍	急性腹症
川崎病	鉄欠乏性貧血	急性腎不全
血管性紫斑病	血小板減少	虐待、ネグレクト
多型滲出性紅斑症候群	白血病、リンパ腫	乳児突然死症候群
感染症	小児がん	来院時心肺停止
麻疹、風疹	腎・泌尿器疾患	溺水、外傷、熱傷
単純ヘルペス感染症	急性糸球体腎炎	異物誤飲・誤嚥、中毒
水痘・帯状疱疹	ネフローゼ症候群	思春期
伝染性単核球症	慢性腎炎	過敏性腸症候群
突発性発疹	尿細管機能異常症	起立性調節障害
伝染性紅斑	尿路奇形	性感染、性感染症

手足口病、ヘルパンギーナ	生殖器疾患	月経の異常
インフルエンザ	亀頭包皮炎	関連領域
アデノウイルス感染症	外陰膣炎	虫垂炎
溶連菌感染症	陰嚢水腫、精索水腫	鼠径ヘルニア
感染性胃腸炎	停留精巣	肘内障
血便を呈する細菌性腸炎	包茎	先天性股関節脱臼
尿路感染症		母斑、血管腫
皮膚感染症		扁桃、アデノイド肥大
マイコプラズマ感染症		鼻出血

4) 「習得すべき診療技能と主義」に関する到達目標 : 日本小児科学会が定めた経験すべき 54 技能のうち、8 割以上 (44 技能 以上) を経験するようにする (研修手帳に記録する)。

身体計測	採 尿	けいれん重積の処置と治療
皮脂厚測定	導 尿	末梢血液検査
バイタルサイン	腰椎穿刺	尿一般検査、生化学検査、蓄尿
小奇形・形態異常の評価	骨髄穿刺	便一般検査
前弯試験	浣 腸	髄液一般検査
透光試験 (陰嚢, 脳室)	高圧浣腸 (腸重積整復術)	細菌培養検査、塗抹染色
眼底検査	エアゾール吸入	血液ガス分析
鼓膜検査	酸素吸入	血糖・ビリルビン簡易測定
鼻腔検査	臍肉芽の処置	心電図検査 (手技)
注射法	静脈内注射	鼠径ヘルニアの還納
	筋肉内注射	消化管造影
	皮下注射	肘内障の整復
	皮内注射	輸血
採血法	毛細管採血	胃 洗 浄
	静脈血採血	経管栄養法
	動脈血採血	簡易静脈圧測定
静脈路確保	新生児	光線療法
	乳児	心肺蘇生
		X線単純撮影 小外科, 膿瘍の外科処置 静脈性尿路腎盂造影 C T 検査 腹部超音波検査 排泄性膀胱尿道造影 腹部超音波検査

	幼児	消毒・滅菌法	
--	----	--------	--

3-2. 各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得

当プログラムでは様々な知識・技能の習得機会（教育的行事）を設けている。

- 1) 朝・夕カンファレンス（毎日）：カンファレンス室で患者申し送りをを行い、診断や治療に難渋している症例に関してはその都度症例カンファレンスを行う。新患については、担当医が症例提示を行い、プレゼンテーション技能も習得する。
- 2) 病棟カンファレンス（毎日）：各病棟でチーム回診後、個々の症例についてより細かい治療方針や患者指導などについて、看護師も交えてカンファレンスを行う。
- 3) 教授回診（毎週）：受持患者について教授をはじめとした指導医陣に報告してフィードバックを受ける。受持以外の症例についても見識を深める。
- 4) 症例検討会（隔週）：診断・治療困難例、臨床研究症例などについて専攻医が報告し、指導医からのフィードバック、質疑などを行う。
- 5) エコーカンファレンス（毎週）：超音波検査を行った症例について担当医が報告し、検査のポイントや診断方法などについて学ぶ。
- 6) 周産期カンファレンス（毎週）：産科、NICU、小児外科、臨床心理士、看護師、助産婦と合同で、低出生体重児、手術症例、先天異常、死亡例などの症例検討を行い、周産期における臨床倫理などについても学ぶ。
- 7) 発達カンファレンス（月 1 回）：臨床心理士から発達検査やカウンセリングを行った症例についての報告と情報共有を行う。発達検査の具体的な内容や要点を学ぶ。
- 8) 抄読会・研究報告会（毎週）：受持症例等に関連した論文概要を発表し、意見交換を行う。研究報告会では講座で行われている研究について討論を行い、学識を深め、国際性や医師の社会的責任について学ぶ。
- 9) 学生・初期研修医に対する指導：病棟や外来で医学生・初期研修医を指導する。後進を指導することは、自分の知識を整理・確認することにつながることから、当プログラムでは、専攻医の重要な取組と位置づけている。

3-3. 学問的姿勢

国内外問わず積極的に最新医療、医学情報の収集に努め、高次医療の現場を経験するとともに、症例検討や学術発表を通じて研究への関心を養う。

- 1) 常に最新の医学情報を収集し、現状の医療を検証する。
- 2) 高次医療を経験し、病態・診断・治療法の研究に積極的に参画する。
- 3) 国際的な情報発信と国際貢献に積極的に関わる。
- 4) 他者からの評価を謙虚に受け止め、生涯にわたって自己省察と自己研鑽に勤める。

3-4. 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性

- 1) 子どもを一つの人格としてとらえ、年齢・発達段階に合わせた説明・告知と同意を得ることができる。
- 2) 患者と家族のプライバシーに配慮し、小児科医としての社会的・職業的責任と医の倫理に沿って職務を全うできる。
- 3) 他者からの評価を謙虚に受け止め、生涯にわたって自己省察と自己研鑽に勤める。
- 4) 自身が小児医療に関わるロールモデルとなり、後進の教育に貢献できる。
- 5) 社会に対して小児医療に関する啓発的・教育的取り組みができる。
- 6) 小児医療に関わる多くの専門職と協力してチーム医療を実践できる。
- 7) 小児医療の現場における安全管理・感染管理に対して適切なマネジメントができる。
- 8) 医療経済・社会保険制度・社会的資源を考慮しつつ、適切な医療を実践できる。

上記を具現化するために、以下の学習機会を設けている。

- ・年に数回企画される医療倫理に関する講演会に出席する。医療倫理に関するE-learning受講を義務付けている。
- ・医療安全に関する講演会が年4回、事例検討会が2回開催され、そのうち2回以上の出席を義務付けている。
- ・感染対策講演会が年3回開催され、1回以上の出席を義務付けている。また、年3つのテーマで研修会が行われ、各テーマそれぞれ1回の出席を義務付けている。

4. 研修施設群による研修プログラムと地域医療についての考え方

4-1. 年次毎の研修計画

研修1年度

前期（4月～9月）

施設：自治医科大学附属さいたま医療センター

研修分野：アレルギー疾患・感染症・呼吸器・消化器・循環器・腎泌尿器・神経・救急
上級医と共に病棟入院患者の担当医となり、診療を行う。小児科医としての基本的技術を習得し、上級医の指導の下で小児の一般診療が行えることを目標とする。

乳児健診を担当し、乳児の発達や小児保健について学ぶ。

小児救急医療を経験する。

後期（10月から翌年3月）

施設：自治医科大学附属さいたま医療センター

研修分野：新生児・先天異常

3か月間、上級医と共にNICUにて新生児医療にあたる。残りの3か月間は、引き続き小児病棟での研修を行う。

研修2年度

期間：6か月

施設：自治医科大学附属さいたま医療センター

研修分野：アレルギー疾患・感染症・呼吸器・消化器・循環器・腎泌尿器・神経・救急
病棟入院患者の主治医となり、主体的に診療を行う。重症疾患・救急疾患に的確に対応できる。エコー検査や造影検査などを習得する。後進の指導をおこなう。

期間：6か月

施設：自治医科大学附属病院

研修分野：膠原病・リウマチ性疾患、腎・泌尿器、血液・腫瘍

専門医研修連携施設で、それまでに経験が不十分な領域の患者の担当医となり、その領域を重点的に研修する。

研修3年度

施設：自治医科大学附属さいたま医療センター（6～12か月）

さいたま赤十字病院小児科（0～6か月）

研修分野：アレルギー疾患・感染症・呼吸器・消化器・循環器・腎泌尿器・神経・救急
病棟入院患者の主治医となり、主体的に診療を行う。外来診療を担当する。小児耳鼻科、小児外科の外来で、小児科にも必要な手技を学ぶ。後進の指導をおこなう。

査読制度のある雑誌に、小児科に関連する筆頭論文を発表する。

注意：研修連携施設への派遣時期は、前後することがあり得る。

4-2. 研修施設群と研修プログラム

〈研修施設群の特徴〉

自治医科大学附属さいたま医療センター

- ・偏りのない多種多様な小児疾患を経験できる。
- ・小児科単独で超音波診断装置を6台保有し、積極的な超音波検査を行っている。また、指導医に日本超音波医学会専門医・指導医がいるので、その指導のもと、専攻医自ら十分な症例の超音波検査を行うことができる。研修中に、基本的な診断技術を習得できることを目標とする。
- ・さいたま市の二次救急輪番担当病院であり、一次救急医療機関からの紹介患者や救急車による来院患者を診療するため、十分な小児救急を経験できる。

自治医科大学附属病院

- ・大学病院であるとともに、自治医科大学とちぎ子ども医療センターと周産期医療センターが併設されている。
- ・高度先進医療や集約的治療が必要な疾患の研修が可能である。
- ・腫瘍，膠原病，腎疾患を中心に研修を行う。

さいたま赤十字病院

- ・小児急性疾患全般の一次・二次医療の研修を行う。
- ・小児保健，外来診療，入院診療のすべてに携わり，地域医療の担い手としての小児科医の役割を経験する。

〈専攻医別のローテーション計画〉

	研修基幹施設 自治医大附属さいたま医療センター	専門研修連携施設 自治医大附属病院	専門研修連携施設 さいたま赤十字病院
専攻医 イ	1	2	3
専攻医 ロ	1、3	2	

専攻医ハ	1、2	3	
専攻医ニ	1	3	2
研修期間	24～30 か月	6 か月	6 か月
施設での研修内容	すべての領域の研修をすることを目標とする。	膠原病・リウマチ性疾患、血液・腫瘍、慢性腎疾患などを重点的に研修する。	地域小児医療の中心となる中核病院の小児医療を学ぶ。

〈領域別の研修カリキュラム〉

研修領域	研修カリキュラム	基幹研修施設	研修連携施設	その他の関連施設
診療技能	小児の患者に適切に対応し、特に生命にかかわる疾患や治療可能な疾患を見逃さないために小児に見られる各症候を理解し情報収集と身体診察を通じて病態を推測するとともに、疾患の出現頻度と重症度に応じた的確に診断し、患者・家族の心理過程や苦痛、生活への影響に配慮する能力を身につける。 1. 平易な言葉で患者や家族とコミュニケーションをとる。 2. 症候をめぐる患者と家族の解釈モデルと期待を把握し、適切に対応する。 3. 目と耳と手とを駆使し、診察用具を適切に使用して、基本的な診察を行う。 4. 対診・紹介を通して、医療者間の人間関係を確立する。 5. 地域の医療資源を活用する。 6. 診療録に利用価値の高い診療情報を記載する。 7. 対症療法を適切に実施する。 8. 臨床検査の基本を理解し、適切に選択・実施する。	自治医科大学附属さいたま医療センター	さいたま赤十字病院	
小児保健	子どもが家庭や地域社会の一員として心身の健康を維持・向上させるために、成長発達に影響を与える文化・経済・社会的要因の解明に努め、不都合な環境条件から子どもを保護し、疾病・傷害・中毒の発生を未然に防ぎ、医療・社会福祉資源を活用しつつ子どもや家族を支援する能力を身につける。	自治医科大学附属さいたま医療センター	さいたま赤十字病院	
成長・発達	子どもの成長・発達に異常をきたす疾患を適切に診断・治療するために、身体・各臓器の成長、精神運動発達、成長と発達に影響する因子を理解し、成長と発達を正しく評価し、患者と家族の心理社会的背景に配慮して指導する能力を身につける。	自治医科大学附属さいたま医療センター	さいたま赤十字病院	
栄養	小児の栄養改善のために、栄養所要量や栄養生理を熟知し、母乳育児や食育を推進し、家庭や地域、環境に配慮し、適切な栄養指導を行う能力を身につける。	自治医科大学附属さい	さいたま赤十字病	

研修領域	研修カリキュラム	基幹研修施設	研修連携施設	その他の関連施設
		たま医療センター	院	
水・電解質	小児の体液生理、電解質、酸塩基平衡の特殊性を理解し、脱水や水・電解質異常の的確な診断と治療を行う能力を身につける。入院患者を担当しながら、全身管理の一環として水・電解質管理を学ぶ。	自治医科大学附属さいたま医療センター	さいたま赤十字病院	
新生児	新生児の生理、新生児期特有の疾患と病態を理解し、母子早期接触や母乳栄養を推進し、母子の愛着形成を支援するとともに、母体情報、妊娠・分娩経過、系統的な身体診察、注意深い観察に基づいて病態を推測し、侵襲度に配慮して検査や治療を行う能力を修得する。	自治医科大学附属さいたま医療センター	さいたま赤十字病院	
先天異常	主な先天異常、染色体異常、奇形症候群、遺伝子異常のスクリーニングや診断を一般診療の中で行うために、それら疾患についての知識を有し、スクリーニング、遺伝医学的診断法、遺伝カウンセリングの基本的知識と技能を身につける。	自治医科大学附属さいたま医療センター		
先天代謝異常 代謝性疾患	主な先天代謝異常症の診断と治療を行うために、先天代謝異常症の概念と基本的な分類を理解する。新生児マス・スクリーニング陽性者には適切に対応し、一般診療の中で種々の症状・所見から先天代謝異常症を疑い、緊急を要する病態には迅速に対応し、適切なタイミングで専門医へ紹介する技能を身につける。また、遺伝医学的診断法や遺伝カウンセリングの基礎知識に基づいて、適切に対応する能力を身につける。	自治医科大学附属さいたま医療センター		
内分泌	内分泌疾患に対して適切な初期対応と長期管理を行うために、各種ホルモンの一般的概念、内分泌疾患の病態生理を理解し、スクリーニング検査や鑑別診断、緊急度に応じた治療を行うことのできる基本的能力を身につける。	自治医科大学附属さいたま医療センター		
生体防御 免疫	免疫不全症や免疫異常症の適切な診断と治療のために各年齢における免疫能の特徴や病原微生物などの異物に対する生体防御機構の概略、免疫不全状態における感染症、免疫不全症や免疫異常症の病態と治療の概略を理解する。病歴や検査所見から免疫不全症や免疫異常症を疑い、適切な検査を選択し検査結果を解釈し専門医に紹介できる能力を身につける。	自治医科大学附属さいたま医療センター	自治医科大学附属病院	
膠原病、リウマチ性疾患	主な膠原病・リウマチ性疾患について小児の診断基準に基づいた診断、標準的治療とその効果判定を行うために、系統的な身体診察、検査の選択、結果の解釈を身につけるとともに、小児リウマチの専門家との連携や、整形外科、皮膚科、眼科、リハビリテーション科など多専門職種とのチーム医療を行う能力を身につける。	自治医科大学附属さいたま医療センター	自治医科大学附属病院	
アレルギー	アレルギー反応の一連の仕組み、非即時型アレルギーの病態、IgE抗体を介した即時型アレルギーについて、アトピー素因を含めた病歴聴取、症状の推移の重要性を理解し、検査・診断・治療法を修得する。	自治医科大学附属さいたま医療セ		

研修領域	研修カリキュラム	基幹研修施設	研修連携施設	その他の関連施設
		ンター		
感染症	主な小児期の感染症について、疫学、病原体の特徴、感染機構、病態、診断・治療法、予防法を理解し、病原体の同定、感染経路の追究、感染症サーベイランスを行うとともに、薬剤耐性菌の発生や院内感染予防を認識し、患者・家族および地域に対して適切な指導ができる能力を修得する。	自治医科大学附属さいたま医療センター	さいたま赤十字病院	
呼吸器	小児の呼吸器疾患を適切に診断・治療するため成長・発達にともなう呼吸器官の解剖学的特性や生理的变化、小児の身体所見の特徴を理解し、それらに基づいた診療を行い、急性呼吸不全患者には迅速な初期対応を、慢性呼吸不全患者には心理社会的側面にも配慮した対応のできる能力を身につける。	自治医科大学附属さいたま医療センター		
消化器	小児の主な消化器疾患の病態と症候を理解し、病歴聴取・診察・検査により適切な診断・治療・予防を行い、必要に応じて外科等の専門家と連携し、緊急を要する消化器疾患に迅速に対応する能力を身につける。	自治医科大学附属さいたま医療センター		
循環器	主な小児の心血管系異常について、適切な病歴聴取と身体診察を行い、基本的な心電図・超音波検査のデータを評価する。初期診断と重症度を把握し、必要に応じて専門家と連携し、救急疾患については迅速な治療対応を行う能力を身につける。	自治医科大学附属さいたま医療センター		
血液腫瘍	造血系の発生・発達、止血機構、血球と凝固因子・線溶系異常の発生機序、病態を理解し、小児の血液疾患の鑑別診断を行い、頻度の高い疾患については正しい治療を行う能力を修得する。 小児の悪性腫瘍の一般的特性、頻度の高い良性腫瘍を知り、初期診断法と治療の原則を理解するとともに、集学的治療の重要性を認識して、腫瘍性疾患の診断と治療を行う能力を修得する。	自治医科大学附属さいたま医療センター	自治医科大学附属病院	
腎・泌尿器	頻度の高い腎・泌尿器疾患の診断ができ、適切な治療を行い。慢性疾患においては成長発達に配慮し、緊急を要する病態や難治性疾患には指導医や専門家の監督下で適切に対応する能力を修得する。	自治医科大学附属さいたま医療センター	自治医科大学附属病院	
生殖器	性の決定、分化の異常を伴う疾患では、小児科での対応の限界を認識し、推奨された専門家チーム（小児内分泌科医、小児外科医/泌尿器科医、形成外科医、小児精神科医/心理士、婦人科医、臨床遺伝医、新生児科医などから構成されるチーム）と連携し治療方針を決定する能力を修得する。	自治医科大学附属さいたま医療センター		
神経・筋	主な小児神経・筋疾患について、病歴聴取、年齢に応じた神経学的診察、発達および神経学的評価、脳波などの基本的検査を実施し、診断・治療計画を立案し、また複雑・難治な病態については、指導医や専門家の指導のもと、患者・家族と	自治医科大学附属さい		

研修領域	研修カリキュラム	基幹研修施設	研修連携施設	その他の関連施設
	の良好な信頼関係の構築，維持に努め，適切な診療を行う能力を修得する．	たま医療センター		
精神行動・心身医学	小児の訴える身体症状の背景に心身医学的問題があることを認識する。出生前からの小児の発達と母子相互作用を理解し，主な小児精神疾患，心身症，精神発達の異常，親子関係の問題に対する適切な初期診断と対応を行い，必要に応じて専門家に紹介する能力を身につける．	自治医科大学附属さいたま医療センター		
救急	小児の救急疾患の特性を熟知し，バイタルサインを把握して年齢と重症度に応じた適切な救命・救急処置およびトリアージを行い，高次医療施設に転送すべきか否かとその時期を判断する能力を修得する．	自治医科大学附属さいたま医療センター		
思春期	思春期の子どものこころと体の特性を理解し，健康問題を抱える思春期の子どもと家族に対して，適切な判断・対応・治療・予防措置などの支援を行うとともに，関連する診療科・機関と連携して社会的支援を行う能力を身につける．	自治医科大学附属さいたま医療センター		
地域総合小児医療	地域の一次・二次医療，健康増進，予防医療，育児支援などを総合的に担い，地域の各種社会資源・人的資源と連携し，地域全体の子どもを全人的・継続的に診て，小児の疾病の診療や成長発達，健康の支援者としての役割を果たす能力を修得する．	自治医科大学附属さいたま医療センター	さいたま赤十字病院	
超音波診断	臓器別領域にとらわれず，小児画像診断の第一選択としての超音波検査の基本的な技法を学び，重要な疾患の超音波診断ができる能力を習得する．	自治医科大学附属さいたま医療センター		

4-3. 地域医療の考え方

当プログラムは自治医科大学附属さいたま医療センター小児科を基幹施設とし、埼玉県のさいたま市医療圏の小児医療を支えるものであり、地域医療に十分配慮したものである。自治医科大学附属さいたま医療センターにおいて、地域医療全般および地域救急医療を経験するようにプログラムされているが、さらに3年間の研修期間のうち3～6ヵ月間はさいたま赤十字病院においても同様に経験するようにプログラムされている。地域医療においては、小児科専門医の到達目標分野24「地域小児総合医療」を参照して、地域医療に関する能力を研鑽する。

<地域小児総合医療の具体的到達目標>

- (1) 子どもの疾病・傷害の予防、早期発見、基本的な治療ができる。
 - (ア) こどもや養育者とのコミュニケーションを図り、信頼関係を構築できる。
 - (イ) 予防接種について、養育者に接種計画、効果、副反応を説明し、適切に実施する。
副反応・事故が生じた場合には適切に対処できる。
- (2) 子どもをとりまく家族・園・学校などの環境の把握ができる。
- (3) 養育者の経済的・精神的な育児困難がないかを見極め、虐待を念頭に置いた対応ができる。
- (4) 子どもや養育者からの確な情報収集ができる。
- (5) **Common Disease** の診断や治療、ホームケアについて本人と養育者に分かりやすく説明できる。
- (6) 重症度や緊急度を判断し、初期対応と、適切な医療機関への紹介ができる。
- (7) 稀少疾患・専門性の高い疾患を想起し、専門医へ紹介できる。
- (8) 乳幼児健康診査・育児相談を実施できる。
 - (ア) 成長・発達障害、視・聴覚異常、行動異常、虐待を疑うことができる。
 - (イ) 養育者の育児不安を受け止めることができる。
 - (ウ) 基本的な育児相談、栄養指導、生活指導ができる。
- (9) 地域医療・保健・福祉・行政の専門職、スタッフとコミュニケーションをとり協働できる。
- (10) 地域の連携機関の概要を知り、医療・保健・福祉・行政の専門職と連携し、小児の育ちを支える適切な対応ができる。

5. 専門研修の評価

専門研修を有益なものとし、到達目標達成を促すために、当プログラムでは指導医が専攻医に対して様々な形式的評価（アドバイス、フィードバック）を行う。研修医自身も常に自己評価を行うことが重要である（振り返りの習慣、研修手帳の記載など）。毎年2回、各専攻医の研修の進捗状況をチェックし、3年間の研修修了時には目標達成度を総括的に評価し、研修修了認定を行う。指導医は、臨床経験10年以上の経験豊富な臨床医で、適切な教育・指導法を習得するために、日本小児科学会が主催する指導医講習会もしくはオンラインセミナーで研修を受け、日本小児科学会から指導医として認定を受けている。

1) 指導医による形式的評価

- ・日々の診療において専攻医を指導し、アドバイス・フィードバックを行う。
- ・毎週の教育的行事（回診、カンファレンス等）で、研修医のプレゼンテーションなどに対してアドバイス・フィードバックを行う。
- ・毎月1回の「ふりかえり」では、専攻医と指導医が1対1またはグループで集まり、研修を振り返り、研修上の問題点や悩み、研修の進め方、キャリア形成などについて非公式の話し合いが持たれ、指導医からアドバイスを行う。
- ・毎年2回、専攻医の診療を観察し、記録・評価して研修医にフィードバックする（Mini-CEX）。
- ・毎年2回、研修手帳のチェックを受ける。

2) 専攻医による自己評価

- ・日々の診療・教育的行事において指導医から受けたアドバイス・フィードバックに基づき、振り返りを行う。
- ・毎月1回の「ふりかえり」では、指導医とともに1ヵ月間の研修を振り返り、研修上の問題点や悩み、研修の進め方、キャリア形成などについて考える機会を持つ。
- ・毎年2回、Mini-CEXによる評価を受け、その際、自己評価も行う。
- ・毎年2回、研修手帳の記載を行い、自己評価とふりかえりを行う。

3) 総括的評価

- ・毎年1回、年度末に研修病院での360度評価を受ける（指導医、医療スタッフなど多職種）。
- ・3年間の総合的な終了判定は、研修管理委員会が行う。修了認定されると小児科専門医試験の申請を行うことができる。

6. 修了判定

1) 評価項目：(1) 小児科医として必須の知識および問題解決能力、(2) 小児科専門医としての適切なコミュニケーション能力および態度について、指導医・同僚研修医・看護師等の評価に基づき、研修管理委員会で修了判定を行う。

2) 評価基準と時期

(1) の評価：簡易診療能力評価 Mini-CEX (mini-clinical Evaluation Exercise)を参考に行う。

指導医は専攻医の診療を 10 分程度観察して研修手帳に記録し、その後研修医と 5～10 分程度振り返ることとする。評価項目は、病歴聴取、診察、コミュニケーション（態度）、臨床判断、プロフェッショナリズム、まとめる力・能率、総合的評価の 7 項目とする。毎年 2 回（10 月頃と 3 月頃）、3 年間の専門研修期間中に合計 6 回行う。

(2) の評価：360 度評価を行う。専門研修プログラム統括責任者、連携施設の専門研修担当者、指導医、小児科看護師、同時期に研修した専攻医などが、①総合診療能力、②育児支援の姿勢、③代弁する姿勢、④学識獲得の努力、⑤プロフェッショナルとしての態度について、概略的な 360 度評価を行う。

(3) 総括判定：研修管理委員会が上記の Mini-CEX、360 度評価を基に、研修手帳の記載、症例サマリー、診療活動・学術活動などを総合的に評価して、修了判定を行う。研修修了判定がおりなければ、小児科専門医試験を受験できないものとする。

(4) 「妊娠・出産、産前後に伴う研修期間の休止」、「疾病での休止」、「短時間雇用形態での研修」、「専門研修プログラムを移動する場合」、「その他一時的にプログラムを中断する場合」に相当する場合は、その都度諸事情および研修期間等を考慮して判定を行う。

<専門医が専門研修プログラムの修了に向けて行うべきこと>

プログラム修了認定、小児科専門医試験の受験のためには、以下の条件が満たされなければならない。下記チェックリストを用いて確認を行う。

1	「小児科専門医の役割」に関する目標達成（研修手帳）
2	「経験すべき症候」に関する目標達成（研修手帳）
3	「経験すべき疾患」に関する目標達成（研修手帳）
4	「習得すべき診療技能と手技」に関する目標達成（研修手帳）
5	Mini-CEX による評価（年 2 回、合計 6 回、研修手帳）
6	360 度評価（年 1 回、合計 3 回）
7	30 症例のサマリー（領域別指定疾患を含むこと）
8	講習会受講：医療安全、医療倫理、感染防止など
9	筆頭論文 1 編の執筆（小児科関連論文、査読制度のある雑誌掲載）

7. 専門研修プログラム管理委員会

7-1. 専門研修プログラム管理委員会の業務

本プログラムでは、基幹施設である自治医科大学附属さいたま医療センター小児科に、基幹施設の研修担当委員および各連携施設での責任者から構成され、専門研修プログラムを総合的に管理運営する「専門研修プログラム管理委員会」を、また連携施設には「専門研修連携施設プログラム担当者」を設置する。プログラム統括責任者は研修プログラム管理委員会を定期的開催し、以下の（１）～（１０）の役割と権限を担う。専門研修プログラム管理委員会の構成メンバーには、医師以外に、看護部、病院事務部、薬剤部などの多職種を含むものとする。

<研修プログラム管理委員会の業務>

- 1) 研修カリキュラムの作成・運用・評価
- 2) 個々の専攻医に対する研修計画の立案
- 3) 研修の進捗状況の把握（年度毎の評価）
- 4) 研修修了認定（専門医試験受験資格の判定）
- 5) 研修施設・環境の整備
- 6) 指導體制の整備（指導医 FD の推進）
- 7) 学会・専門医機構との連携、情報収集
- 8) 専攻医受け入れ人数などの決定
- 9) 専門研修を開始した専攻医の把握と登録
- 10) サイトビジットへの対応

7-2. 専門医の就業環境（統括責任者、研修施設管理者）

本プログラムの統括責任者と研修施設の管理者は、専攻医の勤務環境と健康に対する責任を負い、専攻医のために適切な労働環境の整備を行う。専攻医の心身の健康を配慮し、勤務時間が週 80 時間を越えないよう、また過重な勤務にならないよう、適切な休日の保証と工夫を行うよう配慮を行う。当直業務と夜間診療業務の区別と、それぞれに対応した適切な対価の支給を行い、当直あるいは夜間診療業務に対しての適切なバックアップ体制を整備する。研修年次毎に専攻医および指導医は、専攻医指導施設に対する評価を行う。そこには労働時間、当直回数、給与など、労働条件についての内容が含まれ、その内容は自治医科大学附属さいたま医療センター小児科専門研修管理委員会に報告されなければならない。

7-3. 専門研修プログラムの改善

- 1) 研修プログラム評価（年度毎）：専攻医はプログラム評価表（下記）に記載し、毎年 1 回（年度末）自治医科大学附属さいたま医療センター研修管理委員会に提出する。専攻医からプログラム、指導體制等に対して、いかなる意見があっても、専攻医はそれ

による不利益を被ることはない。「指導に問題あり」と考えられる指導医に対しては、基幹施設・連携施設のプログラム担当者、あるいは研修管理委員会として対応措置を検討する。問題が大きい場合や専攻医の安全を守る必要がある場合などには、専門医機構の小児科領域研修管理委員会の協力を得て対応する。

		平成（ ）年度 自治医科大学附属さいたま医療センター小児科 研修プログラム評価	
専攻医氏名			
研修施設	自治医科大学附属さい たま医療センター	自治医科大学附属病院	さいたま赤十字病院
研修環境・待遇			
経験症例・手技			
指導体制			
指導方法			
自由記載欄			

2) 研修プログラム評価（3年間の総括）：3年間の研修終了時には、当プログラム全般について研修カリキュラムの評価を記載し、専門医機構へ提出する。（小児科臨床研修手帳）

<研修カリキュラム評価（3年間の総括）> A 良い B やや良い C やや不十分 D 不十分

項目	評価	コメント
子どもの総合診療		
成育医療		
小児救急医療		
地域医療と社会資源の活用		
患者・家族との信頼関係		
プライマリ・ケアと育児支援		
健康支援と予防医療		
アドボカシー		

高次医療と病態研究		
国際的視野		
医の倫理		
省察と研鑽		
教育への貢献		
協働医療		
医療安全		
医療経済		
総合評価		
自由記載欄		

- 3) サイトビジット：専門医機構によるサイトビジット（ピアレビュー、7-6参照）に対しては研修管理委員会が真摯に対応し、専門医の育成プロセスの制度設計と専門医の育成が保証されているかのチェックを受け、プログラムの改善に繋げる。また、専門医機構・日本小児科学会全体としてプログラムの改善に対して責任をもって取り組む。

7-4. 専攻医の採用と修了

- 1) 受け入れ専攻医数：本プログラムでの毎年の専攻医募集人数は、専攻医が3年間の十分な専門研修を行えるように配置されている。本プログラムの指導医総数は25名（基幹施設12名、連携施設13名、関連施設0名）であるが、整備基準で定めた過去3年間の小児科専門医の育成実績（専門医試験合格者の平均+5名程度以内）から5名を受け入れ人数とする。
- 2) 採用：自治医科大学附属さいたま医療センター小児科研修プログラム管理委員会は、専門研修プログラムを毎年4～5月に公表し、7～8月に説明会を実施し応募者を募集する。研修プログラムの応募者は、9月30日までに、プログラム統括責任者あてに所定の「応募申請書」および履歴書等定められた書類を提出する。申請書は、自治医科大学附属さいたま医療センター小児科研修プログラムホームページよりダウンロードするか、電話あるいはe-mailで問い合わせる（Tel: 048-647-2111）。原則として10月中に書類選考および面接（必要があれば学科試験）を行い、専門研修プログラム管理委員会は審査のうえ採否を決定する。採否は文書で本人に通知する。採用時期は11月

30日（予定；全領域で統一）とする。

- 3) 研修開始届け：研修を開始した専攻医は、各年度の5月31日までに以下の専門医氏名報告書を自治医科大学附属さいたま医療センター小児科研修プログラム管理委員会に提出する。専門医氏名報告書：医籍登録番号・初期研修終了証・専攻医の研修開始年度、専攻医履歴書（様式15-3号）
- 4) 修了（6修了判定参照）：毎年1回、研修管理委員会で各専攻医の研修の進捗状況、能力の修得状況を評価し、専門研修3年終了時に、小児科専門医の到達目標にしたがって達成度の総括的評価を行い、修了判定を行う。修了判定は、専門研修プログラム管理委員会の評価に基づき、プログラム統括責任者が行う。「妊娠・出産、産前後に伴う研修期間の休止」、「疾病での休止」、「短時間雇用形態での研修」、「専門研修プログラムを移動する場合」、「その他一時的にプログラムを中断する場合」に相当する場合は、その都度諸事情および研修期間等を考慮して判定する。

7-5. 小児科研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件

- 1) 研修の休止・中断期間を除いて3年以上の専門研修を行わなければならない。勤務形態は問わないが、専門医研修であることを統括責任者が認めることが絶対条件である（大学院や留学などで常勤医としての勤務形態がない期間は専門研修期間としてはカウントされない）。
- 2) 出産育児による研修の休止に関しては、研修休止が6か月までであれば、休止期間以外での規定の症例経験がなされ、診療能力が目標に到達しているとプログラム管理委員会が判断すれば、3年間での専攻医研修修了を認める。
- 3) 病气療養による研修休止の場合は、研修休止が3か月までであれば、休止期間以外で規定の症例経験がなされ、診療能力が目標に到達しているとプログラム管理委員会が判断すれば、3年間での専攻医研修修了を認める。
- 4) 諸事情により専門医研修プログラムを中断し、プログラムを移動せざるをえない場合には、日本専門医機構内に組織されている小児科領域研修委員会へ報告、相談し、承認された場合には、プログラム統括責任者同士で話し合いを行い、専攻医のプログラム移動を行う。

7-6. 研修に対するサイトビジット

研修プログラムに対する外部からの監査・調査に対して、基幹施設および連携施設の責任者は真摯に対応する。日本専門医機構からのサイトビジットにあたっては、求められた研修関連の資料等を提出し、また、専攻医、指導医、施設関係者へのインタビューに応じ、サイトビジットによりプログラムの改善指導を受けた場合には、専門研修プログラム管理委員会が必要な改善を行う。

8. 専門研修実績記録システム、マニュアル等

専門研修実績記録システム（様式）、研修マニュアル、指導医マニュアルは別途定める。

研修マニュアル目次

- 序文（研修医・指導医に向けて）
- ようこそ小児科へ
- 小児科専門医概要
- 研修開始登録（プログラムへの登録）
- 小児科医の到達目標の活用（小児科医の到達目標 改定第6版）
- 研修手帳の活用と研修中の評価（研修手帳 改定第3版）
- 小児科医のための医療教育の基本について
- 小児科専門医試験告示、出願関係書類一式、症例要約の提出について
第11回（2017年）以降の専門医試験について
- 専門医 新制度について
- 参考資料
小児科専門医制度に関する規則、施行細則
専門医にゅーす No. 8、No. 13
- 当院における研修プログラムの概要（モデルプログラム）

9. 専門研修指導医

指導医は、臨床経験5年以上の経験豊富な小児科専門医である。今後は、臨床経験10年以上（小児科専門医として5年以上）の小児科専門医で、適切な教育・指導法を習得するために、日本小児科学会が主催する指導医講習会もしくはオンラインセミナーで研修を受け、日本小児科学会から指導医としての認定を受けた者に限定する予定である。また、5年間に1回以上の指導医講習会の出席を義務付ける。

10. Subspecialty領域との連続性

現在、小児科に特化したSubspecialty領域としては、小児神経専門医（日本小児神経学会）、小児循環器専門医（日本小児循環器病学会）、小児血液・がん専門医（日本小児血液がん学会）、新生児専門医（日本周産期新生児医学会）の4領域がある。

本プログラムでは、基本領域の専門医資格取得から、Subspecialty領域の専門研修へと連続的な研修が可能となるように配慮する。Subspecialty領域の専門医資格取得の希望がある場合、3年間の専門研修プログラムの変更はできないが、可能な範囲で専攻医が希望するsubspecialty領域の疾患を経験できるよう、当該subspecialty領域の指導医と相談しながら研修計画を立案する。ただし、基本領域専門研修中に経験した疾患は、Subspecialty領域の専門医資格申請に使用できない場合がある。

以上

